

<三学期の保育の視点（願い）>

- ①クリスマスにお生まれになったイエスさまが、私たち一人ひとりのことを知っていてくださり、愛してくださっていることを知る。神さまから与えられている恵みに感謝して祈る。
- ②自分の好きな遊びを繰り返し楽しむ。
- ③友だちとの関わりの中で、相手の思いに気付いたり、譲ること、待つこと、我慢することを経験する。また、自分の思いを相手に伝える経験をする。
- ④遊びや集いの中で、表現すること、体を動かすことを楽しむ。友だちや保育者と一緒に過ごす楽しさや喜びを感じる。
- ⑤身のまわりのことに意識を持ち、自ら取り組む。
- ⑥冬から春への季節の移り変わりを感じる。

「ころがしドッジボールしよう！」

三学期の保育の視点③・④より

三学期になり、年中組ではころがしドッジボールを楽しんでいます。地面に描かれた円の中に内野の子どもたちが入ります。外野の子どもはボールを転がします。内野の子どもたちは足を広げてボールをくぐらせたり、ジャンプをしたり、身をよじらせたりしながら、転がって来たボールをよけます。あたったら外野になって、ボールを転がします。中にはボールを転がそうとして思わず投げてしまう子どももいます。そのような時、私はその子どもの手をとって、転がし方を教えます。クラス皆でころがしドッジボールをする時もありますし、「ころがしドッジボールしたい！」と言う子どものことばから始まる時もあります。

ある日のことです。ボールにあたって内野から外野になる子どもたちが徐々に増えていきました。ボールがあたってAちゃんは、「んも〜！」と、悔しそうに言いながら、鼻息を荒くして外野へと出て来ました。私はこれまでのAちゃんを思って、『Aちゃん、涙がでてしまう



かしら?』と予想し、「ざんねん、あたっちゃったわね」と声をかけました。Aちゃんは、しばらく黙って肩で息をしていたのですが、やがて自分で気持ちを切り替えて外野に転がってくるボールを追い始めました。

一方、外野をしているBちゃんとCちゃんのところへボールが転がってきた時のこと、二人で同時にボールを掴みました。二人はしゃがんだ姿勢のまま、ボールから手を放さず、けわしい顔をして動きません。『先生、どちらのボールなの?』と言いたげに、近くに居る私の顔をじっと見つめます。「どっちかしらね〜…」と私が首をかしげていると、近くにいたDちゃんが、「同じくらいだったからさ、ジャンケンで決めるのはどう?」と提案します。BちゃんもCちゃんも拍子抜けするぐらいすんなりと納得し、ジャンケンで決めました。

また、Eちゃんは外野になり、ボールを追いかけるのですが、あと一步のところまでボールがとれません。「もう〜、まだ1回もボールとってない。ボール転がしたいよー」ということばがもれます。Fちゃんは「Eちゃん、早く行かないとボールとれないよ」と言います。それでもEちゃんはなかなかとれません。するとそのEちゃんの様子を感じていたGちゃんが、自分のとったボールを、Eちゃんのところへボールを持って行き、「はい。まだ、1回もやってないでしょ? いいよ」とボールを譲りました。Eちゃんは「ありがとう」と言って、ボールを転がします。(いつもいつも譲られるばかりになってはいけませんが、この時は良い関わりだなと見ていました。)

ルールのある遊びの中、また勝ち負けのある遊びの中で、子どもたちは多くのことを学んでいます。自分の思う通りにいかないこともあります。「こういうこともある」と心で折り合いをつけたり、友だちの思いを知ったり、自分の思いを言ったりすることも経験します。その中で、「皆ですると楽しい」という思いや、「またやってみたい!」という思いが育って欲しいと願っています。

「今日はじぶんでしたんだよ」

三学期の保育の視点⑤より

1月半ばより冬の寒さが厳しくなってきました。朝登園して来る子どもたちは、上着をしっかりと着込み、寒さに肩をギュッと上げながらやって来ます。上着はコート掛けにかけます。帰りの時間になると、コート掛けから自分の上着をとって、帰りの身支度を始めます。ご家庭でも身のまわりのことは、自分で出来るように色々工夫をして下さっていることと思います。幼稚園でも、「自分の持ち物の管理ができるように」「自分のことは自分でしようとするように」「まずは自分でやってみる意識がもてるように」を心に留めて過ごしています。一人では難しい時に、「手伝ってください」と言えることも大事なことです。

ある日の降園時、私はいつものように「椅子に座りましょう。上着の前も閉めましょうね。難しいという人は手伝うわね」と伝えました。するとFちゃんがいつものように、「先生手伝って下さい」と、私のところへやって来ました。「このファスナー、最初が難しいんだよね」とFちゃんが囁きます。「なかなかうまくいかない時もあるわよね」と言って、私はFちゃんのファスナーを上げます。次の日もその次の日も、Fちゃんは私のところへやって来ました。その度に私は「こうやって、ぐっと下に力を入れて…」とコツを伝えながら一緒にファスナーを上げます。それから数日後の降園時、『あら？今日はFちゃんが私のところへやって来ないわ』と思っていると、ニコニコしながら椅子に座っています。「先生、今日ね、一人でしたの～」と嬉しそうに胸を張って、閉まっているファスナーを見せてくれました。

これは一例ですが、自分のことを自分でする力は、生活する力へとつながり、生活を軽やかにします。これからも少しずつできることが増えていくでしょう。その過程で、先まわりはし過ぎずに、でも必要な時にちょうどよく手を添え、言葉を添えるものでありたいと思います。

(田中 百合)